

追悼

学祖の精神を述べ伝えた大澤俊夫先生

岩佐 信道

大澤俊夫先生の傘寿記念の文集に原稿を書いたのは平成十六年の秋であった。それから三年たたないうちに、先生がお亡くなりになろうとは、誰が予想したであろうか。長年モラロジー研究所の研究部長として、モラロジーの学問的研究の土台を築かれ、その後、麗澤大学の国際経済学部創設に尽力された先生が、古巣ともいべき道徳科学研究センター（以前の研究部）の顧問になられたのは、平成十四年四月であった。もともとと研究センターの行く末を見守っていただけだと思っていたのに、あまりにも早い先生との別れに、道徳科学研究センターの一同は、残念でならない。

先生が平成十七年六月にまとめられた『師の心を求めて』の第一部が「学祖の精神を述べ伝える」であることにも表れているように、大澤先生の生涯は廣池千九郎博士の精神を世に正しく伝えることで貫かれていたといえよう。もちろん、先生は、昭和十三年に亡くなった廣池千九郎博士に直接会っておられないが、その後の歴代の所長、理事長先生の心を心として努力されたのは、このことを追い求められたお姿であったと思う。

思えば、私が初めて大澤先生を知ったのは、麗澤大学に入学した昭和三十八年であった。先生は、全学年必修であった「道徳科学」の一年の最初の担当者であった。先生は、ご自分が初めて麗澤の門をくぐられた時、当時の塾長である廣池千英先生から「今日から諸君を紳士として遇する」と語りかけられた感激を話された。そしてモラロジーを創建した廣池博士の願いや、今後研究すべきモラロジーの課題として廣池千九郎博士が残されたテーマなどにふれて「この学祖の精神を継ぎたいと思う諸君は是非頑張ってほしい」と語りかけられた。入学したばかりの私たちにこのような期待を語られる大澤先生に、私は千英先生の言葉に通じるものを感じたのであった。

大澤先生は、私にとって大学の恩師であるばかりでなく、初めて就職したモラロジー研究所研究部の部長であった。この研究部に属する当時の若手の研究員は、夜、先生のご自宅に集まり、廣池千九郎博士の著作を読む会に参加することができた。これは、青年時代の廣池千九郎の熱い思いを知る貴重な機会であった。当時、研究部では、大澤部長のもと、廣池千九郎関係の資料の整理が着々と進められ、日誌研究会も毎月、定期的に行われた。『道徳科学の論文』の新版、『廣池千九郎日記』『伝記廣池千九郎』の刊行など、後の廣池千九郎研究の基礎はすべて大澤先生によって築かれたといっても過言ではない。

私は、研究部の教育研究室に所属し、道徳教育の分野に興味をもって勉強を進めていた。特に、ハーバード大学のコールバーグという学者の研究に注目していた。というのも、コールバーグが提出していた道徳性の発達段階における慣習的道徳と慣習以後の道徳の区別は、モラロジーにおける普通道徳と最高道徳の区別と一脈通じるところがあると考えていたからである。そして、結局、大澤先生のご指導により、一九八一年そのコールバーグ教授のもとに留学することになった。

コールバーグ教授の部屋は、Appian Way (アッピア街道) という通りに面したラースン・ホールの三階にあった。私は初めて教授に挨拶をした際、モラロジー研究所の英文の出版物として、廣池千九郎がレコードに吹き込んだ『特質』の英訳版をさしあげた。これは大澤先生の助言によるものであった。教育学大学院での秋の学期が始まるとまもなく、センターの研究会で発表の機会を与えられた。私は、『道徳科学の論文』の全体の構成を紹介した上で、その十四章五項の「正義と慈悲」に関して発表した。当時、ハーバードでは、コールバーグ教授の正義の道徳論に対して、ギリガン準教授がケア理論を提出しようとしていた。(C・ギリガンの In a Different Voice という本は次の年、一九八二年に出た。) 道徳を正義とケアというそれぞれ異なる立場から研究していたハーバードの人々には、廣池千九郎の「正義の基礎に立つ慈悲」という考えは少なからぬ関心を呼んだのではないかと思われる。事実、十四章五項の英訳を差し上げていたギリガン準教授からは、帰国も近くなつて、「私の授業を手伝わないか」と相談をもちかけられた。

ハーバードでの二年目の過ごし方についてコールバーグ教授に相談した私は、教授から博士課程で研究することを勧められた。そのことを大澤先生に報告すると、「それなら頑張りなさい」とサポートしていた。き、結局、留学期間の一年延長が法人から認められ、博士課程を修了して帰国することができた。帰国した翌年(一九八五年)は廣池学園創立五〇年の記念の年であった。大澤先生は、その記念行事の一環としてコールバーグ教授の招聘を提案された。幸いコールバーグ教授はアン・ヒギンズ博士とともに秋の二週間をさいて来日くださった。一週間にわたるコールバーグ教授を囲む研究会、講演会には、全国から多数の道徳教育関係者が参集した。この時の講演会のテーマの一つに「第六段階と最高道徳」というのがあった。第六段階とは、コールバーグ教授の発達段階で最も高い段階のことであり、自分の道徳論と廣池千九郎の研究との

つながりを意識した講演であった。大澤先生は、「次の機会には先生を是非廣池博士ゆかりの谷川温泉に」と言われたが、これはコールバーグ先生に、廣池千九郎の人心救済への熱い想いを肌で感じてもらえれば、とのことのお考えであったと思われる。

この廣池学園来訪の後、コールバーグ教授は、廣池千太郎所長に当てた手紙の中で、廣池千九郎のモラロジーと自分自身の道徳理論が、共に道徳の普遍的原理を認めるものであることを指摘した上で、それぞれの国の教育の置かれた状況や方法に対する開かれた態度をもって道徳教育を国際的な観点から研究することの意義を強調した。

この提案は、一九八七年夏日本で初めての道徳教育国際会議として実現した。八六年秋、その準備のためにハーバードを再訪した私は、ラスン・ホールの部屋で先生から次のような言葉を聞いた。「私は、廣池千九郎先生に深い共感を覚える。廣池先生と私は、道徳の科学的研究に力を尽くし、その研究の成果をもとに、道徳教育に取り組んできた。そして廣池先生も私も、健康面で大きな悩みを抱えている」と。また、先生は自宅で次のようにも語った。「自分は、あと五年間は道徳教育の仕事に専念する。しかし、その後は魂の救済の問題を自らの問題として研究しようと思う」と。ハーバードの道徳教育研究センターの責任者として、今すぐ、魂や救済といった問題に深入りすることはできないが、いずれこれらの重要な問題に取り組みたいとの決意の表明であったと思う。教授のこのような関心の広がりには、日本で自分よりも三〇年早く道徳の科学的研究を展開し、しかも、最も高い段階の道徳の実質を明らかにしようとした廣池千九郎という人物の存在を知ったことが大きな要因ではなかったかと思う。私は、「次の機会には是非、谷川温泉に」との大澤先生の言葉を思い出して、それを伝えるとともに、「このコールバーグ先生が、いよいよそこまで研究を

広げるのか」と期待に胸がふくらんだ。しかし、残念ながら、先生は次の年に亡くなり、魂や救済の研究が展開されることはなかった。もしコールバーグ先生の魂や救済に関する研究が進み、谷川温泉で自らの肉体的苦痛を癒すとともに、廣池千九郎博士の魂と対話することができていたら……と、考えてしまうのである。

私は、この一九八六年秋のハーバード滞在中に、先生の秘書の書棚に *Characteristics of Morality and Supreme Morality* (廣池千九郎著の『特質』の英訳) を見つけた。これは八一年にコールバーグ教授に初めてお目にかかった時研究所からのお土産として差し上げたものであった。手にとってみると、随所にコールバーグ先生独特の傍線が入っており、先生がどれだけ関心をもってこの本を読んだかがわかった。私はその全ての箇所をメモした。秘書の書棚にあったということは、先生が他の教員や院生にも読むことを勧めたからであろう。本自体もかなり軟らかくなって、相当に読み込まれたことがうかがわれた。

ところで、私の論文研究は、コールバーグの道徳性発達理論を基礎にして、日米における道徳判断の比較研究を意図するもので、コールバーグ教授を指導教授とし、セルマン教授とギリガン準教授が審査員であった。しかし日本に戻ってからは、さまざまな仕事に追われて時間ばかりが過ぎた。「研究ははかどっているかい」とあたたかい声をかけてくださったのは大澤先生であった。「論文を完成させるまでは、他のことであまり無理をしないように」とご配慮をいただき、資料の収集という点では、研究部の皆様からもさまざまなご支援をいただいた。

こうして大澤先生にも多大なご心配をおかけした学位論文であったが、結局、一九八九年春に提出することができた。コールバーグ先生亡き後、指導教授になっていたのはルバイン教授であった。コールバ

ーグ教授が文化の違いを越えた道徳の普遍性を強調したのに対して、ルバイン教授は、文化の違いに関心をもつ先生であった。ルバイン教授は、私の論文を大変喜んでくださり、英語での出版を勧められた。論文の要点は、コールバーグの道徳性発達論には文化の違いをこえた妥当性があるが、一部に再検討を必要とするということであった。すなわち、コールバーグが示した慣習以後の段階は、個人の自由と自律性を中心概念としているのに対して、慣習以後の段階に関して日本で得られた材料には、「全体に支えられ、つながり合った存在としての人間」とでもいふべき考え方が見られ、したがって慣習以後の段階の定義づけは、そうした材料をも考慮に入れて再検討する必要があるということであった。私は、このような結論は、恩師コールバーグ教授の理論を否定するものではなく、むしろ、それを修正、補完するものと考えている。そして私は、学位論文の結論で、「全体に支えられ、つながり合った存在としての人間」という考え方の事例として「伝統の原理」を学問的に展開した廣池千九郎に言及した。大澤先生のご指導をいただいて決意し、ご支援をいただいで続けることのできた私の留学であったが、学祖廣池千九郎の人間のとらえ方に言及して締めくくることができた。大澤先生には、専門的な議論に立ち入ることを遠慮して、論文の中身について詳しく報告したことはなかったが、もし報告していれば、多少喜んでいただけたかもしれない。

廣池学園創立五〇年記念の行事に招聘したコールバーグ先生の提唱で実現した一九八七年の道徳教育国際会議以来、モラロジー研究所ではさまざまな国際会議が行われてきた。そして、二〇〇九年夏には、初めて、モラロジーを創立した廣池千九郎に焦点を当てた国際会議が開催されようとしている。もちろん、これも世界の人々に廣池千九郎に関する理解を深めてもらうという点ではほんの一步にすぎない。「学祖の精神を述べ伝える」ことに生涯を捧げられた大澤先生の偉大な足跡を思うとき、自分の非力を恥じるばかりであ

る。先生には、もつともつとご指導いただけるものと思っただけに、その急逝は残念でならない。今となつては、大澤先生に見守っていただけることを祈るばかりである。